

# 白馬モチーフの變奏

——二種の白馬寶卷をめぐる——

辻  
リ  
ン

## 一 はじめに

『白馬寶卷』は、後述のように二系統の異なる物語があるが、いずれの物語においても、靈異な白馬が危機に瀕する主人を運ぶ（白馬馱く）というモチーフ（以下、「白馬モチーフ」と稱する）が見られる。本稿はこのような白馬モチーフの變化を手がかりに、二種の白馬寶卷および関連通俗文藝資料の比較検証を行うとともに、民間信仰において神の使者としての白馬は、物語の構想にいかなる力學を持つのかを考察したものである。

白馬寶卷について、車錫倫『中國寶卷總目』（以下『總目』と略稱）に次のような著録がある（カナは筆者によるもの、数字は『總目』の通し番號）。

ア 〇〇二一 白馬寶卷 二卷

參見『白馬馱屍寶卷』、『劉文英寶卷』。

(1) 清康熙榮盛堂刊本、一冊。〔傳借華〕

イ 〇〇二二 白馬馱屍寶卷

又名『劉文英白馬寶卷』、『斬楊二卷』。參見『白馬寶卷』。

(1) 民國三十七年（一九四八）孫奇寶抄本、一冊。〔蘇州〕

(2) 舊抄本、一冊。卷名『劉文英白馬寶卷』。〔蘇州〕

(3) 舊抄本、一冊。〔文學〕

(4) 甘肅高臺舊抄本、一冊。〔方步和〕

ウ 〇六四〇 劉文英寶卷 上下集

又名『玉帶記寶卷』、『白馬卷』。參見『白馬寶卷』。

- (1) 民國九年(一九二〇) 上海文益書局石印本、二册。  
〔史語〕<sup>2)</sup>
- (2) 民國十三年(一九二四) 上海文益書局石印本、二册。  
〔上海、浙江、趙景深、胡士瑩〕
- (3) 民國上海惜陰書局石印本、二册。卷名『玉帶記寶卷』〔文學、北師、浙江、京都、趙景深、胡士瑩、譚正璧、澤田〕
- (4) 民國二十一年(一九三二) 寧波朱彬記書局鉛印本、一册。〔李世瑜〕

寶卷作品に異名同話、同名異話が多數あることについて、もつとも早く指摘したのは李世瑜『寶卷綜録』である。<sup>3)</sup> 車錫倫氏もそれを踏まえて寶卷目録の集大成とされる『總目』において、異名同話の寶卷について、相互に参照するように促している(例えば前掲のように、「參見『寶卷』」と記し、その関連付けをしてある)。しかし、ここで注意したいのは、イとウは確かに異名同話であるが、アの榮盛堂刊本は後述する梗概からも分かるように、イ、ウ系統とは内容がまったく異なるもの(同名異話)である。つまり、内容が異なる二系統の白馬寶卷が現存しているのである。イ、ウ

系統の『劉文英白馬寶卷』にも『白馬卷』、『白馬馱屍寶卷』、『白馬馱寶卷』、『玉帶記寶卷』など多くの異名があるためか、『總目』は同名異話のアと混同したのであろう。ただ、興味深いのは、冒頭で述べたように二種のまったく異なる物語(ア、イとウ)に共通する白馬モチーフ、すなわち白馬が屍または仙(主人公はもとと仙界の下凡という設定もあるため、「白馬馱仙」という題名もある)を運ぶというモチーフが見られること、しかも「白馬寶卷」という巻名から分かるように、それぞれの物語において、この白馬モチーフは重要な役割を果たしていることである。

白馬は民間説話において神聖な運び手として語られ、靈異な存在として信仰されている。従って、二種の白馬寶卷(ア、イとウ)の整理・分析を行うことによって、それぞれの物語の系譜を明らかにすることができる。とともに、白馬モチーフはいかに活用されているのか、民間説話の題材、民間信仰・祭祀は語り物の演變にいかなる影響を與えてきたのか、という一連の問題の解明にも繋がると思われる。

以下、まずそれぞれの物語の梗概およびその系譜をみておこう。

## 二 熊子貴白馬寶卷

前掲『總目』著録の『白馬寶卷』は熊子貴が妻を離縁する(「休妻」という)物語である(ここでは便宜上、この系統を「熊子貴白馬寶卷」と稱する)。「熊子貴白馬寶卷」については、尚麗新「『白馬寶卷』研究」に詳しい論考がある。<sup>(4)</sup>

「『白馬寶卷』研究」は同寶卷の諸版本の内容と形式の變化、ならびに寶卷と山西道情との關係を考察し、同じ題材を持つ南方と北方の寶卷の比較も行っている。しかし、あくまでも「休妻」の題材(前掲アとその系譜のみ)についての検討であり、「熊子貴 白馬寶卷」の同名異話(イとウ)の存在も、また靈異な白馬の存在にも言及していない。そこで、本稿は白馬モチーフに着目して、民間説話と寶卷との関わり方について、いささか検討を加えたい。

ここではまず尚麗新氏による研究に即して、同題材の現存版本を掲げ、物語の梗概を紹介する。「熊子貴白馬寶卷」は次のような版本がある。

①清嘉慶九年(一八〇四)金陵榮盛堂刻本『白馬寶卷』  
(又名『太上三清白馬寶卷』)

②清光緒二二年(一八九六)山西永濟相天吉抄本『白馬

寶卷』(又名『太上三清白馬寶卷』)

③清末山西介休抄本『白馬寶卷』

④民國八年(一九一九)年重刻本『白馬馱仙傳』<sup>(6)</sup>

⑤甘肅酒泉『白馬寶卷』(又名『熊子貴休妻寶卷』)<sup>(7)</sup>

⑥甘肅山丹『金定寶卷』

⑦甘肅涼州『白馬寶卷』<sup>(9)</sup>

⑧甘肅金張掖『白馬寶卷』<sup>(10)</sup>

⑨民國十五年(一九二六)繆仲文抄本『大富寶卷』(又名『財神寶卷』) 中國社會科學院文學所

①～③は同源で、④は先天道による改編である。以上、氏の研究による。因みに、①は即ち前掲『總目』著録のA版である。⑤～⑧は河西寶卷、⑨は吳方言區の寶卷である。各版の細部の違いはさまざまであるが、大筋には大差がない。梗概は次のようである。

河南偃師縣の熊子貴は妻・杜金定と一男一女がいる。熊子貴は古い師に、妻の杜金定は福運で、自分は貧乏運と言われ、怒りと妬みで、馬一頭を與えて妻を離縁した。行先を失い、嘆き悲しむ杜金定は白馬に乗り、馬王爺に「馬の行き着いた先が嫁ぎ先」と祈願し、白馬の向かうままに行

き先を任せた。白馬は金定を乗せ、歩み続け城西の廢窯（瓦を焼いた古窯）の前まで来て停まった。金定は廢窯に住む乞食の張三と夫婦になり、その後二人は勤勉儉約のため大財を成した。一方で、熊子貴は福運の妻を追い出すと、忽ち没落し子供二人までも賣つて、物乞いになり、のち糠を食べる時に噎せて死んだ。金定は生き別れた子供たちとも再會し、最後に一家は太上老君に連れられて昇天する。

福運を持つ女が非情勝手な夫に離縁され、人里離れた所でひとり貧しい男の所へ訪ねて来て押し掛け女房になった、おかげで男は裕福になり、二人は幸福に暮らしたという話は、改めて言うまでもなく、日本では炭焼き長者譚として廣く傳わり、中國の各少數民族や東南アジアにも類似の民間故事が多く存在する。中國の民間故事では、このように女が何かに導かれ、見知らぬ男と結婚することを「天婚」（天が豫め定めている結婚）という。「天婚」及び日本で廣く傳わる炭焼き長者譚は、明の張岱が江南の水路を夜航する船での見聞を記録した『夜航船』の中にも次のような類話が收められている。<sup>②</sup>

蒙氏有女、欲爲擇配。女曰：「王擇配，非天婚也。我欲

倒騎牛背，任牛所之，即嫁之。」王勉從其請。（中略）見一樵者，女曰：「此吾婚也。」王怒絕女。

（蒙王には娘がいて、その娘の爲に結婚相手を選ぼうとする。娘は言う「父王が結婚相手を選んでくれるなら、「天婚」ではなくなりません。私は牛の背に逆向きに騎り、牛のゆくところに任せたい。そこが即ち私の嫁ぎ先です」。蒙王は勉めてその願いに従う。（牛が行き着いた所で）ある柴刈りをみると、娘は言う「この人が私の花婿です」。父王は怒って娘を勘當した。）

明の謝肇淛撰『滇略』卷十にも類似の記録があり、『雲南通誌』卷二六にも収録されており、また明・倪輅著『南詔野史』にも收められているので、このような「天婚」の民間説話は明清時期にすでに廣く流傳していたものと認められる。因みに「天婚」は大別すると、冷酷無情な父親が娘を勘當した話（初婚型）と勝手非情な亭主が妻を離縁する話（再婚型）と二種類あるが、『熊子貴白馬寶卷』は後者である。

ここで注目したいのは、悲嘆に暮れる女を幸福へと導き、赤の他人の兩者を結びつける赤い糸ならぬ靈異な動物の登場である。民俗學者柳田國男は早くからこの存在に

着目し、「海南小記」の中に沖繩宜野灣市の昔話（再婚型）を取りあげて、「夫に追出された女房、（中略）クラ（雀）が彼女を導いた」と述べている。<sup>13)</sup>伊藤清司は「炭焼き長者の話 搬運神」において、比較民俗学の視点から、現行の日本各地の民話と中國の各少数民族の民間故事數十例を掲げて比較し、このような「天婚」の眞の「搬運神」は女の福運であると結論づけるとともに、「天婚」の誘導役は牛馬などがあるが、漢民族では馬が多いと指摘している。<sup>14)</sup>これらの一連の類話において興味深いのは「馬に運ばれて結婚」（「走馬天婚」という）説話である。女を乗せた馬が歩み続け、たまたま停まったところに住んだ男と夫婦になったというのは、むしろ眞實ではないだろう。このような「走馬天婚」型の民間故事の多くでは、馬は人語を理解し、乗った女などの意を體する靈異な存在として語られている。白馬に運ばれて、主人公は悲運から福運に急轉した。つまり白馬モチーフは物語の構想において重要なターニングポイントとなっているのである。

興味深いのは、『熊子貴白馬寶卷』では、追い出されて途方に暮れた金定は白馬に乗る前に、馬王爺に祈願することを付け加えられている。馬王爺云々の話は白馬が金定を

乞食男と結びつける仲人役を演じるモチーフに屋上屋を架す複合部分であるが、しかし、この部分の挿入によって、物語の性格は大きく變わる。馬王爺は「靈官馬元帥」のことであり、道教の四大守護神の一人として民間でよく知られている。この寶卷では馬王爺のほか、太白金星や玉皇大帝など多くの道教神も登場する。また、上述した榮盛堂刻本（ア）の表紙題は『太上三清白馬寶卷』であり、さらに寶卷の創作背景について「伏聞正月拾五日太上・三清・以在雲臺山聚會、於衆善眞人講經說法、忽見大藏經中有一段因果」と記されている。太上三清とは、「元始天尊」と「太上道君」、「太上老君」のことで、道教を代表する最高神である。これらの限られた要素から、『熊子貴白馬寶卷』の成立は道教系教派によるものと推定するにはまだ不十分かもしれないが、しかし、この寶卷は民間故事で廣く傳わる「走馬天婚」の話柄を採用し、神聖な運び手としての白馬のイメージを、都合よく道教神の馬王爺へと轉嫁し、道教化の役割を果たそうとしていることは明らかである。もともと民間でよく知られる白馬が主人を運んで結婚（「走馬天婚」という説話が、『熊子貴白馬寶卷』では、道教神の加護によって災いを祓い福に轉じたことに變わったので

ある。民間説話において白馬のなすべきところが、寶卷の中では、道教神が全知全能の存在として登場し、白馬にお告げをしたりする設定となっている。そして、その時點で作品の性格も民間説話ではなくなり、道教信仰仕立ての寶卷へと變貌した。次に、もう一種の白馬寶卷をみてみよう。

### 三 劉文英白馬寶卷

前掲イ、ウ『白馬寶卷』には異名が多數あるため、ここでは便宜上、同内容のものを『劉文英白馬寶卷』と稱する。筆者の知る限り、『總目』に著録のある各種版本のほかに、ハーバード大學イエンチン圖書館 (Harvard-Yenching Library) と蘇州戯曲博物館にはいずれも通し番號〇六四〇の(2)と同版が收藏され、ロンドン大學SOAS圖書館にも民國十九年(一九三〇)上海文益書局石印本が所藏されている<sup>(15)</sup>。また江蘇省張家港市河陽山地區には抄本『白馬馱寶卷』が傳わっている<sup>(16)</sup>。

現存する上記版本の内容は大同小異で、ほとんど民國年間の吳方言地域の寶卷である。ここでは早稻田大學の所藏本に據って、その梗概を次に記しておく<sup>(17)</sup>。

宋の仁宗の頃、河南運水縣の劉文英は受験のため上京する。途中、太行山の山賊・陸林に捕えられ、殺されかけたが、陸林の娘の青蓮に助けられる。二人はひそかに結婚して一夜を契った。翌日、青蓮から路銀、無量瓶・温涼蓋・碧玉帶という三つの寶物、白馬を贈られて山を離れ、都にのぼる。しかし宿屋を經營する楊二に、その寶物も路銀も奪われ、自身は絞殺され枯井戸に捨てられた。その時たま太后が重い病氣になり、治したものには高官を與えるという。楊二は奪った寶物を献上し、寶物の力で太后の病を治して高い官位に任ぜられた。玉帝が雷神を遣つて枯井戸を打開すると、劉文英の屍骸が現れた。白馬はその屍骸を乗せて、(白馬馱屍) 飛ぶように街や市場を過ぎ、包拯のもとに届けた。包拯が策略をもつて太后から碧玉帶を借りて劉文英を生還させる。その訴状により楊二は捕われ處刑される。皇帝が怒つて包拯と劉文英を罰そうとした時、紅羅山の賊が反亂を起こし、これを劉文英が征した。賊とは文英の妻の青蓮が十數年前から獨立した山賊で、賊首の陸天保は實は文英の子であったため、ただちに降伏した。包拯は龍圖閣學士に、文英は狀元に、天保は保國將軍に、青蓮は忠義夫人に封ぜられ、また青蓮の父の陸林も招安に應

じて山を下った。

この物語は明の成化説唱詞話の中の『新刊全相説唱張文貴傳』（以下『張文貴傳』と稱する）と同話であることが既に指摘されている。胡士瑩『話本小説概論』では「この『玉帶記』の内容は『張文貴傳』とほとんど同じである」としている。<sup>19)</sup>二者の關係について、譚正璧は明の成化説唱詞話が発見された際、『張文貴傳』に關するところで、「この物語が本とするとところは不明である。これと同題材のものは僅か清代に傳わる唱本（辻按：彈詞を指す）と寶卷にしか見出せない。兩書名は皆『白馬馱屍記』又の名『玉帶記』という。寶卷は唱本に據ったようである。」と記している。<sup>20)</sup>また包公説話にみる三種の寶物のモチーフに注目して、大塚秀高氏は「包公説話と周新説話—公案小説生成史の一面面」において、「張文貴傳」は『包待制智賺生金閣』雜劇に類するが、恐らくは元・明間無名氏による包待制智賺三件寶（玉帶記寶卷）では主人公は劉文英」と同話であろう。」と述べている。<sup>21)</sup>このように先學の研究は、主に『張文貴傳』または包公説話の本事の究明に着目していたが、『劉文英白馬寶卷』は『張文貴傳』と内容がほとんど同じであることも明示された。ここで筆者は先學の研究を踏まえ、

白馬モチーフの變化を手掛かりに、物語の變遷についてさらに検討を加えたい。

右記の梗概から分かるように、『劉文英白馬寶卷』では白馬は二回登場する。山を離れる文英に青蓮が白馬を贈る場面と白馬が文英の屍を乗せて走る場面である。白馬を贈る際、次のように唱う。

此馬通靈是寶珍、你若得到爲難處、白馬能救你當身。佳人無意來說出、不料後來果然眞（上卷 葉八b）

こうして白馬の靈異と神力を讃えると同時に、物語の展開に伏線を敷いた。『張文貴傳』<sup>22)</sup>でも同じように、文貴の屍骸をみると、白馬はその屍を乗せて（白馬馱屍）開封府に直入する。包公に經緯を聞かれると、龍駒馬（白馬）は人語が分かるという。

口咬衣裳只一挾、馱其背上便行呈。（中略）一呈來到開封府、馬兒直入府廳門。（中略）屍靈撤在案卓下、拜在廳前不起身。相公當下將言問、近前來問馬兒身、住在何州併甚縣、姓甚名誰那里人、來到東京因甚事、甚人打死

這屍靈。馬兒被問不能答、腮邊珠淚兩交傾。

ちなみに、寶卷と『張文貴傳』とは、細部の違いは様々あるが、主な相違点を挙げるならば、馬の名稱のほかに、登場人物名とその出身地、贈った寶物の名稱である。

劉文英白馬馱屍（または玉帶記）の物語は民國年間に寶卷のほかに、次のような説唱本が傳わる。

○彈詞『新刻白馬馱屍劉文英還魂玉帶記全本』一卷、民國年間上海槐蔭山房書莊石印本、南京圖書館藏。<sup>(21)</sup>

○鼓詞『白馬馱屍玉帶記』、民國年間上海椿蔭書局。

○淮戲『改良新纂白馬馱屍』五集、民國年間上海大達書局印行。<sup>(22)</sup>

寶卷と上記民國年間の彈詞・鼓詞・淮戲の中において、物語の主人公はいずれも劉文英である。また彈詞と鼓詞、淮戲では、劉文英と青蓮の出會いの部分や白馬が屍骸を背に乗せて走る部分などを長大化しているが、寶卷のそれは短くしている。ただ寶卷は玉帝、雷神を登場させ、主人公の前世の因縁譚を付け加えて、現世での運命を説明づけ

るなど、いわば寶卷らしく改編されている。總じていえば、各語り物はデイトールこそそれぞれ多少の異同はあるものの、受驗のために上京↓山賊に遭遇↓山賊の娘と出會い夫婦になる↓三つの寶と白馬を贈られる↓宿屋で寶を奪われ殺される↓白馬が屍を背に乗せ開封府に突入↓包公、悪人を裁く↓碧玉帯で生還、という大筋はほとんど變わらない。

また、現行の地方劇でも、このような白馬が主人の屍を運ぶというモチーフは多く認められる。各地方劇では主人公は張文貴あるいは劉文英としているが、内容はほぼ同じである。ここでは管見の限りで目ぼしい類話を持つ演劇を、その内容を省略し、題名のみを主人公名と贈られた寶物を添えて列挙する。

越劇『玉帶記』、劉文英 白馬と寶物三つ

錫劇『白馬告狀』、劉文英 白馬と寶物三つ

湖北黄梅戲『二龍山』 張文貴 寶馬と寶物二つ

安徽黄梅戲『八盤山』 張文貴 千里駒と寶物四つ

長沙・嶽陽花鼓戲『青龍橋』 張文貴 龍駒馬と寶物二つ

山東柳琴戲『二龍山』 張文貴 寶馬と寶物二つ



『劉文英白馬寶卷』および同内容の語り物、各地方劇と、さきに述べた『熊子貴白馬寶卷』と共通する趣向は、白馬が危機に瀕した主人を乗せる「白馬馱」というモチーフが物語の重要なターニングポイントとなつてゐることである。しかし、異色なのは、福建、臺灣など閩方言地域の関連する語り物や演劇である。それらの物語展開においては、紙馬が白馬に取つて代つたのである。

#### 四 『紙馬記』と『張文貴傳』、『劉文英白馬寶卷』

上述した劉文英白馬馱屍のモチーフに關して、福建地域の説唱と演劇は他地域と異なる特色を持つ。関連する説唱と演劇は主に、莆仙戲、福州平話、閩南歌仔等がある。以下にその版本を挙げる。

○福州平話『紙馬記』二集、民國上海書局石印、福州益開書局總批發<sup>33)</sup>

又の名「七星女下凡」。初集は封面に『紙馬記』、巻首に『七星紙馬記』、版心に『紙馬記』と題する。二集は封面、巻首、版心いずれも『包公審春太』と題する。

○閩南歌仔『張文貴紙馬記』上本、『父子狀元歌』下本、民國三年廈門會文堂石印本<sup>34)</sup>

上本は封面に『最新張文貴紙馬記』上本』、巻首に『最新張文貴紙馬記』、版心に『紙馬記歌』と題する。下本は封面に『最新父子狀元歌』下本』、巻首に『張文貴父子狀元歌』、版心に『父子狀元歌』と題する。

なお、施博爾は「五百舊本歌仔冊目錄」（『臺灣風物』第十五卷第四期、一九六五年）に、自身が臺灣で収集した、廈門書坊が一九〇六年から一九二二年の間に刊行した十種類の歌仔冊を収録している。その中にも、一九一〇年廈門會文堂が刊行した『最新父子狀元歌』と『最新張文貴紙馬記』が存在する。<sup>35)</sup>

○福州戲『新編白紙馬評話調』、福州集新堂鉛印本<sup>36)</sup>

○霞浦畚族小説歌『紙馬記』<sup>37)</sup>

冒頭に「造出歌言分人聽。文貴家中實是窮，天送仙女結成雙，又養一男又一女。一男一女四个人，好去上京求功名。七姐落凡贈三寶，小二店內去安身。」と唱う。

これらのほかに、莆仙戲『張文貴』、閩劇『贈三寶』（又の名『白紙馬』<sup>38</sup>）等があり、現在でも上演されている。各説唱と演劇の粗筋はほとんど同様である（行論の便宜上、以下この系統の物語を『紙馬記』と稱する）。内容は、上述した劉文英白馬馱屍の物語よりやや煩雑になるのでここにおいては、大筋のみをあげる。

四川成都の張文貴は、科擧受験のため妻・餘惠娘と子女を連れて上京する。皇叔・趙三王は鰲山で提燈祭り（燈會）を行い、若い女を全員祭りに出るよう強要した。そこで上京していた張文貴の妻惠娘が氣に入られ、妾とされ連れられた。惠娘は顔に傷を入れ妾になることを拒んだところ、虐められた。文貴は、訴状を誤って趙三王側に提出してしまい、訴状は焼かれ、文貴もひどく殴られた。實は惠娘は天界の星の下凡で、天界の七仙女の一人の現し身であった。文貴は仙女に助けられ、仙女は寶物である還魂帽、聚仙瓶、白紙馬の三つを贈った。寶物を見た宿屋の店主楊春太は、文貴を殺害し寶物を奪う。楊春太は、その寶物を皇帝に献上し、進寶状元という官職を得た。白紙馬は風に化け、公務歸りの包公が乗る駕籠を風で止めた。白紙馬は元に戻り、包公を誘導して文貴の死體を見つけた。包公は、

計略により皇帝から還魂帽を借り、文貴を生き返らせる。文貴は包公にいきさつを訴える。包公は皇叔趙三王と楊春太を斬首し、餘惠娘を救う。文貴は進寶状元になり、文貴の子は科擧試験で狀元になり、一家大團圓となる。

このあらすじから分かるように、『紙馬記』の主人公の名は張文貴であるが、明の成化説唱詞話『張文貴傳』と比べると、前半部分の妻が皇叔に略奪される部分と仙女下凡のモチーフ、後半の白紙馬が包公を誘導する部分は明らかに異なっている。しかし、危機に遭う文貴は（仙）女に助けられ、白馬と寶物三つ（または白紙馬を含めて三つ）を贈られるという、この話の構圖は『張文貴傳』と底通している。なお、趙皇叔が妻惠娘を略奪しようとする部分は、明の傳奇『瓊林宴』とかなり似通っている。『瓊林宴』の版本は現在伝わっていないが、『曲海總目提要』卷三十五に物語の梗概が収録されており、その主人公の名前は范仲虞である。『龍圖耳録』及び『三俠五義』第二十三―二十七回が述べる物語とは人名に多少異同があるが、類話である。現行の京劇や徽劇の『打棍出箱』『黑驢告状』もこの物語の一部である。また、別名『七星紙馬記』、『七星女下凡』のように、七人の天界の仙女が俗界におりて活躍する

モチーフが取り入れられている。文貴は貧しい書生で、妻はもともと仙女姉妹の七番目の妹の下凡であった。ほかの六人の姉が妹を救うために、危機に遭った文貴を助けたうえ、寶物と白紙馬を贈った。これは『搜神記』以来の古くからある董永遇仙説話の仙女降嫁譚を想起させる。

紙馬記の現存する最古の版本は福州平話『七星白紙馬』乾隆十五年（一七五〇）刻本である。福州平話は、福州方言で説唱する傳統的語り物藝能の一種であり、福建省の福州、福清、閩清など十数の縣市および臺灣、東南アジアの福州籍華僑の集居地で流行している。明末の福州平話の名手丘梧椿が語る『武松殺嫂』などの書目が傳わる。福建省藝術研究院に福州平話石刻本は三七三冊も所蔵されている<sup>(43)</sup>。また鄭麗生『福州舊本平話經眼紀目』の記載によると、同氏の所蔵する福州平話は、百種近くあり、いずれも清代の刻本である。その中にも、『新刻七星白紙馬』がある。清雍正年間（一七二三～一七三五）の『陳靖姑傳』、乾隆年間の『七星白紙馬』の刻本が現在にも傳わっていることから、當時福州平話はすでにかなり盛行していたことが認められる。

また、福州平話『七星紙馬記』の冒頭に、「話表此本奇

聞・叫・做・紙馬記、小説・七星女下凡、此人家住四川成都府遷居直隸・常州・城」という白がある。この資料から、語り手が當時すでに傳わる『紙馬記』をもとにし、「七星女下凡」のモチーフを付け加えて盛り場で語っていたのではないかということも推察される。しかし、限られたこの一點の資料から性急な推理はここでは控えることにする。いずれにせよ、現存するテキストから、福州平話の傳統的演目である『紙馬記』物語は、少なくとも乾隆年間には既に形成されたと判断して間違いないだろう。

『紙馬記』の全體的内容から見ると、明成化説唱詞話『張文貴傳』の構想を骨組みに、明の傳奇『瓊林宴』の題材を織り交ぜ、古くからある仙女降嫁譚のモチーフも取り入れていた趣向が見られる。ところが、張文貴の出身地について、前掲『紙馬記』の冒頭では「四川成都府遷居直隸・常州・城」と語る。直隸は中央直轄の意味で、明代の洪武九年（一三三七）から始まる行政區域直隸省のことである<sup>(44)</sup>。直隸（省）常州（中央南京直轄の常州）は清初には江南省所管の行政區域に變わる。つまり、明の洪武以降に始まり、明清時代に廣く知られた地名に、宋の仁宗時代の包公を登場させたのである。口承文藝によく見られる未熟さが現れ

ると同時に、『紙馬記』が語られ始めた上限の時期も示唆する。

こうしてみると、『紙馬記』の形成の過程は、民國年間に吳方言地域の唱本に據つて改編された『劉文英白馬寶卷』のそれとは明らかに異なる。閩方言地域の『紙馬記』の傳承は、明の成化説唱詞話『張文貴傳』と劉文英白馬馱屍記と、白馬モチーフの異傳をつなぐ重要な一例であると思われる。『紙馬記』が閩方言地域のみに流傳している要因の一つは、福州平話など閩方言で語る語りの名手によって創作・潤色された物語が、同方言を用いる説唱や演劇などの文藝で傳承されてきたためであると考えられる。方言區域の中で獨自に變容した、いわば、物語のガラパゴス化とでもいふべき現象が窺えて興味深い。

更に注目したいのは、白馬が屍を運ぶモチーフであるはずが、『紙馬記』の中では、白紙馬が風に化けて包公を誘導するというように變わっている。紙馬とは、信仰の風習として、葬儀の際などに佛前で燃やすものである。騎馬の神々を印刷された紙（木版印刷）、または竹（細木）で馬の姿を編みそれに白紙を張って作った馬、という二種類がある。秦代では神への生贄の一種として、神前に生馬が捧げ

られていた。神前に奉納して色々な祈願を行う古くからの風習は變わらないが、時代を下つて、生馬が紙に書いた馬（白紙の張つた竹の馬）、すなわち「紙馬」に變わり、それを焼香とともに燃やして祈願する形に變わつた。<sup>(47)</sup>この系譜の物語が傳承されていた過程で、どの作品から、いかなるきっかけで白馬が「白紙馬」に變わつたかは、現在では考證する術もないが、神への祈願の運び手は何も活きる白馬とは限らないからなのかもしれない。紙馬を燃やすことによつて、人々はその世にいる亡霊と交信することができ、つまり、人と神鬼との結び役のイメージから紙馬が派生されたことも想像しがたくない。

ところで、古くからの信仰の中で根強く受け繼がれている紙馬の風習は、現在でも中國の農村各地で、祖先祭祀や葬儀の際などに行われており、決して一地域の獨特な信仰活動ではない。しかし興味深いことに、唯一閩方言地域の白馬が屍を運ぶというモチーフにおいて、紙馬が白馬の代わりに登場した。この變化は、莆仙戲の上演形式と祭祀性と關係があるのではないかと考えられる。莆仙戲は、唐代百戲と宋代傀儡戲を起源とする、長い歴史をもつ演劇であると言われる。現在でも福建中部と南部地域に流行して

おり、五千種類以上もの演目が傳わる。莆仙戲『張文貴』は、傳統的な演目であるが、残念ながら、明清時代の版本や關連史料がほとんど現存していないため、物語展開において白馬から白紙馬への變化（またはその逆の可能性も否めない）が、莆仙戲と關りがあるという斷定はここでは控えておく。

莆仙戲『張文貴』および『張文貴傳』の流傳・變化については、今後の檢證資料を待ちたいが、いずれにせよ、紙馬というのは、一種の巫覡文化の要素が、様々な宗教における神々への信仰を融合したものである。「白馬馱屍」というプロットから白紙馬への變化は、神に納奉するという文藝の祭祀性がまだ残っていることを窺わせる。これは單に作品の内容の質的な問題であるにとどまらず、その背景には、人々の意識に反映して、文藝の性格の變化として、作品に定着されたものであったのだろう。民衆による福を願ひ災いを祓う心理的欲求をありありと映し出しているのみならず、民間信仰と説唱文學の相互作用も示している。

以上、白馬モチーフの變化を手掛かりに、『紙馬記』と『張文貴傳』、『劉文英白馬寶卷』の比較分析を行ってきた。白紙馬モチーフは『張文貴傳』の系譜において特異的な存

在であるが、それは白馬に神聖さが認められ、その改變によつてさらに靈能性を實現するという趣旨が特殊化したものなのか、それとも一部の地域で行われていた信仰・祭祀習俗が物語の創作に反映したものなのか。民間信仰と物語のモチーフの因果關係は目下のところ定かではなく、今後の檢證資料を待ちたい。

ただ、この系譜の物語に見られる「白馬馱」<sup>(47)</sup>「三寶」<sup>(48)</sup>から、洛陽の白馬寺（中國最古の佛教寺院）の傳説を想起させる。シルクロードを經由しての佛教の中國傳來に際しては、白馬が經典を運んだとされる白馬寺傳説は、周知のごとくであるが、興味深いことに、かかる白馬寺傳説についての史料記録には、「白馬馱經（白馬、經卷を運び）」、「三寶之始（中國の佛教の始まり）」というフレーズがよく見られる。<sup>(49)</sup>むしろ、ここでの「三寶」は佛教のことを指すが、しかし、この「白馬」と「三寶」という用語のペアリングと、上述した物語における「三つの寶物（贈三寶）」と白馬モチーフ（白馬馱）というセットは單なる偶然の一致なのだろうか。「白馬」と「寶物」というキーワードから、『大唐三藏取經詩話』において、女人國の女王が夜明珠という寶物と白馬を三藏に贈るくだりを自然と連想させる。<sup>(50)</sup>

このように、よく知られる傳承は、初期から空想的・比喩的なものと認められつつも、キーワードとして人々の記憶に残り、そのキーワードをもとに、物語はそれぞれの地域における歴史的變化に合せてバージョンを變え、語り継がれてゆく。これらはいまでも續く物語の原點としてみることでできる。ただし、語り物や地方劇として演じられている文藝は、その原話をたどれば、古代・中世時期に起源する物語も、その多くは、明清時期に變形され、附加された筋書きを基礎としたものである。『紙馬記』『張文貴傳』『劉文英白馬寶卷』の中にみる三つの寶物と白(紙)馬が登場するモチーフはおそらく語り手の單なる思いつきから始まり廣がったものではあるまい。キーワードからの連想による語り手の再創作、演變、流傳という物語の形成過程の可能性も否めないと考える。

## 五 結びに

ここまで、二種の白馬寶卷の関連資料を整理・分析し、物語の系譜と流傳を明らかにしてきた。白馬モチーフは、二種の異なる物語の中において、極めて重要な役割を果たしている。『熊子貴白馬寶卷』では、白馬は離縁された女

を幸せな結婚と財貨獲得への橋渡し役を果たし、悲運に嘆き悲しむ女を一轉して幸福の絶頂へ導いたのである。『劉文英白馬寶卷』では、物語のクライマックスは何といても靈物である白馬の登場を轉機に、災いが福に變わった点である。

白馬は荷負い馬のみならず、とりわけ神聖視され信仰を集めてきた。佛教文化においても重要な意味を持ちシンボルのような存在であり、数々の傳説がある。例えば、白馬はシッタールタ(佛教の始祖釋迦の本名とされる)王子が、城を出て出家する時に乗った神聖なる乗り物であったこと、唐の高僧玄奘が天竺へ取經した時も白馬に乗っていたことも傳えられる。また上述した白馬寺傳説も廣く知られる。傳説の史實的眞偽はともあれ、それらの傳説からも、白馬は古來宗教性を帯びた聖なる動物であるとみなされていたことが、容易に理解できる。

このように傳説の題材は、脈々と受け継がれて傳承される。「白馬」は興味深い概念となっている。かかる「走馬天婚(走る白馬の行くところに任せて結婚する)」「說話や、「白馬馱屍(白馬が主人の屍を運ぶ)」、「紙馬伸冤(白紙馬が主人の冤罪を晴らす)」といった題材の中に、馬が單に靈感を持

つ「運搬神」としてのみならず、民間信仰において、民衆の願望も神々へ運び、寶卷及び関連する語り物作品の中で特別な役割を果たしている。物語の内容において、白馬モチーフが社会的弱者を災いから幸福へと導き、起死回生の願望を實現させる。物語の構想においては、重要なターニングポイントとして、前半と後半を密接につなぐ力學をもつ。

最後に、本稿において白馬モチーフを手掛かりに、現存する『白馬寶卷』およびその系譜をみてきた。二種の白馬寶卷を比較検証したのは、同じように神聖視される白馬のモチーフを採用しながら内容と手法を異にする、二つの寶卷のモチーフの取り入れ方の差異と類似性の本質、變化の要因を説明しようとするがためである。その基礎作業を通じて、たとえば、民間傳説、民間信仰と語り物文藝との關わり方の様相を、ある一側面から究明し得たなら幸甚である。

### 注

- (1) 車錫倫『中國寶卷總目』、北京燕山出版社、二〇〇〇年。  
 (2) 臺灣中央研究院歷史語言研究所『俗文學叢刊』三五六冊に収録する上海文益書局石印本『劉文英白馬寶卷』は刊行年が「民國十九年（一九三〇）」とする。

- (3) 「一種寶卷往往名稱各異。傳唱愈廣者，別題、簡稱愈多。」李世瑜編『寶卷綜錄』一三頁、上海書局、一九六二年。  
 (4) 尚麗新・車錫倫『北方民間寶卷研究』所收、三二五～三六六頁、商務印書館、二〇一五年。  
 (5) 傅惜華舊藏、現藏中國藝術研究院。『白馬寶卷』研究」（注4所收）の書影によれば、元の表紙（殘葉）に「新鐫 太上三清白馬寶卷 榮盛堂梓行」とある。補配された表紙に「嘉慶玖年正月吉立」の手書きがあることから、嘉慶九年正月が刊行の下限時間とするほうが穩當であろう。なお、傅惜華『寶卷總錄』では「清康熙間金陵榮盛堂刻本」とする（巴黎大學北京漢學研究所刊、一九五二年）。  
 (6) ④は尚麗新私藏。前掲注4所收『白馬寶卷』研究』に一部書影と詳しい紹介がある。なお、筆者は①～④の版本をまだ目睹していない。  
 (7) 『酒泉寶卷』第二輯、一三三～一四七頁、肅州區文化館主編、甘肅文化出版社、二〇一二年。卷末の校録注①には「『白馬寶卷』、又稱『熊子貴休妻寶卷』」とある。  
 (8) 『山丹寶卷』下、一二八～一四四頁、甘肅文化出版社、二〇〇七年。  
 (9) 『涼州寶卷』一三二～一七二頁、甘肅武威天梯山石窟管理處、二〇〇七年。  
 (10) 『金張掖寶卷』(一)、二二三～二三七頁、甘肅文化出版社、二〇〇七年。このほかに、車錫倫『中國寶卷研究』に「張掖花寨鄉農民戴興位家（中略）現保存抄於清光緒三三年

- (一九〇七)の『熊子貴尋親寶卷』(下略)とある。二五五頁、廣西師範大學出版社、二〇〇九年。
- (11) 細部の相違については、注4所收『白馬寶卷』研究』を参照されたい。
- (12) 明・張岱著、張雪健點校『夜航船』卷五、一一七頁、三秦出版社、二〇一六年。
- (13) 『柳田國男全集』第三卷、三六九頁、筑摩書房、二〇〇〇年。
- (14) 『比較民俗研究』二二號、二〇〇七年。
- (15) 砂山稔「劉文英寶卷考」附SOAS圖書館所藏寶卷目錄』を参照、岩手大學人文社會科學部紀要『アルテス リペラレス』五八號、三五～四五頁、一九九六年。
- (16) 中共張家港市委宣傳部等編『河陽寶卷集』上冊、七二九頁、二〇〇七年。
- (17) 早稻田大學圖書館藏(文庫94-F0399)、上海惜陰書局石印本二卷。表紙題「繪圖玉帶記寶卷」。澤田舊藏。前掲『總目』〇六四〇の(3)に著録。
- (18) 澤田瑞穂「増補 寶卷の研究」『寶卷提要』に『玉帶記寶卷』の梗概を收録。一九〇頁、國書刊行會、一九七五年。
- (19) 「此『玉帶記』情節幾乎與『張文貴傳』完全相同」。胡士瑩著『話本小說概論』下冊、四九九頁。商務印書館、二〇一一年。
- (20) 「此故事不知所本、與此同題材的、僅見有清代流傳的唱本和寶卷。二書皆名『白馬馱屍記』,又名『玉帶記』。寶卷似據唱本。『譚正璧學術著作選十一 評彈通考』三八六頁、上海古籍出版社、二〇一二年。
- (21) 大塚秀高「包公說話と周新說話—公案小説生成史の側面」、『東方學』第六六輯、六一～七五頁、一九八三年。
- (22) 『包待制智賺三件寶』は『録鬼簿續編』に著録があり、『宋仁宗御斷六花王 包待制智賺三件寶』と題する。『寶文堂書目』、『太和正音譜』、『元曲選目』、『今樂考證』、『曲録』でも著録がある(いずれも『智賺三件寶』の題)が、しかし佚書のため、詳細内容は不明である。『張文貴傳』(および『玉帶記寶卷』)において、女性が文貴に三つの寶物を贈る(贈三寶)というくだりはあるが、包公が文貴を生還させるため計略をもつて借りたのはそのうちの碧玉帯のみであり、『宋仁宗御斷』の内容もない。従って、同話か否かについては、筆者はここでは判断を控えたい。
- (23) 『明成化說唱詞話叢刊』、五九六～五九七頁、鼎文書局、一九七九年。
- (24) 盛志梅著『清代彈詞研究』參照、二七九頁、齊魯書社、二〇〇八年。
- (25) 臺灣中央研究院歷史語言研究所傳斯年圖書館藏。『俗文學叢刊』五四二冊收録、五六三～五七八頁、二〇一六年。
- (26) 臺灣中央研究院歷史語言研究所傳斯年圖書館藏。『俗文學叢刊』一一五冊收録、四四七～五五〇頁、二〇〇二年。
- (27) 又の名『獻三寶』、『白馬馱屍』など。孫世基編著『中國越劇戲目』、四九～五〇頁、寧波出版社、二〇一五年。
- (28) 又の名『包公鏢楊二』。夏葦塵編著『常州戲劇』七一～七二



- 頁、中國文史出版社、二〇〇三年。
- (29) 又の名『三寶記』。湖北省戲劇工作室編『湖北地方戲曲叢刊』、二三八頁、一九八三年。
- (30) 「又名『白馬馱屍』見黃梅戲第三集《二龍山》及廬劇第二集『白玉帶』」。安徽省文學藝術研究所編『安徽省傳統劇目彙編劇情簡介』一二六頁、一九八〇年。
- (31) 範正明編著『湖南地方戲曲提要』四九六頁、湖南文藝出版社、二〇一一年。
- (32) 山東省戲曲研究室『山東地方戲曲傳統劇目彙編 第四集 柳琴戲』、一九八七年。
- (33) 『俗文學叢刊』三七一冊收録、一〇三八頁、二〇〇四年。
- (34) 『俗文學叢刊』三六三冊收録、一五七―一九四頁、二〇〇四年。
- (35) 汪毅夫著『閩臺縁與閩南風：閩臺關係、閩臺社會與閩南文化研究』、一九頁、福建教育出版社、二〇〇六年。
- (36) 『俗文學叢刊』一一二冊收録、七五―一二六頁、二〇〇二年。ちなみに、劉復、李家瑞編著『中國俗曲總目稿』には「白紙馬」として著録、一二〇頁、國家圖書館出版社、二〇一一年。
- (37) 福建省少數民族古籍叢書委員會編『福建省少數民族古籍叢書 畲族卷』、二〇一〇年。
- (38) 『福建戲曲傳統劇目索引第五輯』一二三頁、福建省文化局編印、一九六〇年。
- (39) 徐鶴萃、王宇、陳柔編著『閩劇史稿』四六頁、海風出版社、二〇一二年。
- (40) 『曲海總目提要』一五五六頁、天津古籍書店影印、一九九二年。
- (41) 『三俠五義』と『瓊林宴』の關係については、胡士瑩『話本小説概論』（前掲注19、八四五頁）、趙景深『中國小説叢考』（齊魯書社、一九八〇年、四九五頁）を参照。
- (42) 楊榕著『福建戲曲文獻研究』一五一―一五二頁、中國戲劇出版社、二〇〇七年。
- (43) 福州平話については、大塚秀高「福州平話西遊記からみる原『西遊記』（埼玉大學大学院文化科學研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第三號、二〇〇六年）にも紹介がある。
- (44) 曾曉萍、劉芝鳳など著『閩臺民間藝術傳統文化遺產資源調查』一六五頁、廈門大學出版社、二〇一四年。
- (45) 『曲苑』、一九八七年第三期。
- (46) 『明史・地理志二』に「洪武初、建都江表、革元中書省、以京畿應天府直隸京師」と記載。
- (47) 紙馬については、陶思炎『中國紙馬』（東大圖書股份有限公司、一九九六年）、吉田隆英「紙馬の研究——東アジアにおける宗教的印刷物の發展・流通と神の使者としての馬」（『東アジア出版文化研究』にわたずみ一所收、三六九―三八一頁、二玄社、二〇〇四）を参照。
- (48) 白馬寺傳説は魏・楊銜之『洛陽伽藍記』卷四にも記載がある。原文「白馬寺、漢明帝所立也、佛入中國之始。寺在西陽門外三里御道南。帝夢金神、長丈六、頂背日月光明。金神號

曰佛。遣使向西域求之，乃得經像焉。時白馬負經而來，因以爲名」（上海書店，二〇〇〇年）。入矢義高譯注（東洋文庫五一七、平凡社，一九九〇年，七頁）も参照。ちなみに、この白馬寺傳説における佛教傳來や明帝云々は僞説という報告もある（例えば、白鳥庫吉『西域史研究 上』などがある。岩波書店、一九四一年、四八九頁）。

(49) 例えば、『大藏一覽』『漢明帝迎佛』の項に、「(略)釋迦像四十二章經、白馬馱之、邀之洛陽、此中土有三寶之始也」とある。

(50) 「女王遂取夜明珠五顆、白馬一疋、贈與和尚前去使用。僧行合掌稱謝。」標點宋人平話 大唐三藏取經詩話「經過女人國處 第十」一四頁、商務印書館發行、一九二五年。

\* \* \*

作者：辻 リン（柯 凌旭）

Author: TSUJI Rin

標題：白馬題材の變奏 —— 二種白馬寶卷の文本及流變

Title: Variations on the Motif of "White Horse" —— Focusing upon Two Types of BaiMa Baojuan 白馬寶卷

摘要：目前存世的白馬寶卷文本，其實包含二種不同的

系譜：熊子貴白馬寶卷和劉文英白馬寶卷。前者爲民間廣泛流傳的休妻故事；後者則與『張文貴傳』，閩方言地區的『紙馬記』有同源關係。但二種內容殊異的白馬寶卷中，在情節結構上起轉折作用的同是「白馬」題材。本稿以「白馬」題材的衍化爲線索梳理了相關文本。在此基礎上指出白馬作爲完成民間信仰的一種載體，在寶卷及相關俗文學故事中有着特別的功能。在情節內容上，白馬題材有利於滿足弱者的轉禍爲福、起死回生的願望；在藝術結構上，類似於故事中的線索，於轉折處使整個故事上下連貫。也由此可見，寶卷及其他唱本故事的衍變和民間信仰、傳說題材有著密切的交互影響關係。

關鍵詞：白馬寶卷 張文貴傳 紙馬記 玉帶記 福州平話